

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 5-10

性役割

目次

要 約	2
1. 子どもたちの性役割観	6
●生まれ変わるとしたら	7
●学校でリーダーとして	7
●学級委員は男子向き?	9
●男らしさ・女らしさ	12
●能力・体力のちがい	14
●子どもたちの描く性的将来像	18
●男子に生まれ変わりたい理由	21
2. 作られる性役割観	22
●性役割の意味	22
●先生のしかり方のちがい	23
●男女を区別する発言	25
●親たちのしつけ	26
●おとなの発言の影響	28
●職業に関する性役割との関連	29
●能力観への影響	32
まとめに代えて	34
シリーズ/講座・子ども調査入門 ② 学校を単位とした調査	深谷昌志 36
資料1 調査票見本	39
資料2 学年・性別集計表	47

調査レポート／性役割

要約



① 男性に生まれ変わりたい

性役割の受け入れ度を見るための「生まれ変わることができたら、今度は男子に生まれたいか、それとも女子に生まれたいか」の設問に対しては、男子は91%が同性への生まれ変わりを望んだが、女子はそれが64%に過ぎず、女子のほうに性役割に対する不満が大きいことが見いだされる。(図1)



② 学級委員は男の子

現在の学級委員(クラス代表)の性別は、男子が57%、女子が17%と、大きな偏りがある。また副委員には逆に女子が45%と圧倒的である。(図3)



③ 男子向きと女子向きの仕事

学校内での各種の仕事には、男子向きと女子向きの仕事があると、かなり多くの子どもたちがとらえている。(図4・図5)

東京学芸大学助教授 深谷和子

千葉県市立平山小学校教諭 広森 滋

④ 男子の行動パターンのほうが価値的に

学校内での行動パターンにも、かなり性差があると子どもたちは把握している。男子は積極的、社交的だがやや粗野、女子はまじめできれい好きだが、陰湿ですぐ泣く、がその把握のしかたである。(図6・図7)



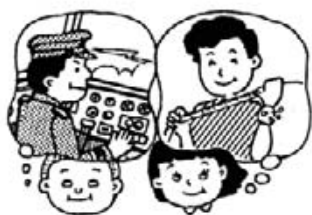
⑤ 男子のほうが能力がある？

能力的にも、男子は向上心や決断力、勇気やチャレンジ精神、能力の高さが特徴で、女子は、くり返す仕事や単純でていねいな仕事の特徴であると、とらえられている。(図8)



調査レポート／性役割

要約



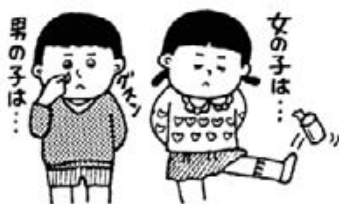
⑥ 社会的地位の高い職業は男子向き？

職業的にも、社会におけるリーダー的役割、社会的地位の高い仕事、むずかしい技術を要する職業は男子向き、やさしい仕事、芸術的な仕事は女子向きと考えられている。(図10)



⑦ 先生はわりと公平

先生は、男子と女子で、あまりしかり方を区別しないが、やや男子にきびしい傾向があると、子どもたちは評価する。(図12)



⑧ 性役割を強調するしつけ

男の子は～、女の子は～のような性役割を強調する発言も、先生や親たちからときどき出るものようである。(図13・図15・図16)

調査概要

1. 調査主題 性役割
2. 調査視点 次世代を担う子どもたちの性役割観をさぐる

3. 調査項目 学校での係の仕事の体験／その仕事の性役割意識／学校の先生の性役割対応の実態(しかり方の男女差)／父母の性役割対応の実態／職業への性役割意識／生まれ変わり願望など

⑨ 教師の発言の影響力

教師が性役割を強調する発言をよくすると、
子どもの性役割受容度は影響を受ける。

(図17・図20・図23・図24・図25・図26)



⑩ 女の子は環境によって育つ?

両親の性役割の受容度は、とくに女性がどう
生きてらよいかとの女性的性役割に大きく影響
する。男の子より女の子の成長に、両親の態度
が関連をもつ点に、留意しなければならないだ
ろう。(図18・図19・図21・図22)



4. 調査時期 昭和60年4月
5. 調査対象 小学4～6年
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	193	165	358
5年	247	272	519
6年	326	291	617
計	766	728	1,494

1. 子どもたちの性役割観



昨年が「国連婦人の10年」の最終年に当たり、7月にナイロビで世界婦人会議が開かれたことは、まだ記憶に新しい。先の国会では男女雇用機会均等法も成立したし、女子差別撤廃条約も批准されて、わが国の男女平等は、たてまえの上ではまた一歩確かな歩みを進めたとも言われている。しかし目をわれわれの日常生活に転じれば、依然として数々の領域においてさまざまな問題が残されたままである。

その一つは、人びとの心の奥深く、根強い性役割の意識がひそんでいることだろう。むしろ性役割は、男性と女性で構成されているこの世界に、ちょっぴり色どりやアクセントを生み出している部分もあって、一概に否定

されるべきものではないかもしれない。しかし「男性は社会で身を立て、女性は家庭を守ればよい」などの前時代的な性役割観をはじめとして、この際徹底的にたたきつぶしたほうがいいと思う観念や態度はたくさんあると思うのだが、それがなかなかむずかしい。折にふれて「外と内」的な発言が男性たちの口から出て来ようとし、またそれを受け入れようとする女性層もけっこうあるように見うけられる。

しかし硬直化したおとな世代はともかくも、次世代を担う子どもたちの間ではどうなのか。本レポートはそうした問題意識に立って、次世代の担い手である子どもたちの性役割観を明らかにしてみようとしたものである。

● 生まれ変わるとしたら

性役割の受け入れ度を見るための、「もし生まれ変わるとしたら、今度は男に生まれたいですか、それとも女に生まれたいですか」という質問は、社会学では有名なものの一つだが、子どもたちの場合はどうだろうか。

「役割」には個人が生まれつき持っている個人の力では変えられないものと、職業や身分のように、個人の努力で、ある程度は変更可能なものがある。性役割は、たくさんの「役割」（地位の動的側面）のうち、性別という生物学的に変えられない「地位」に伴われるものだけに、いちばん人間を拘束し、フラストレートさせるものの一つだろう。

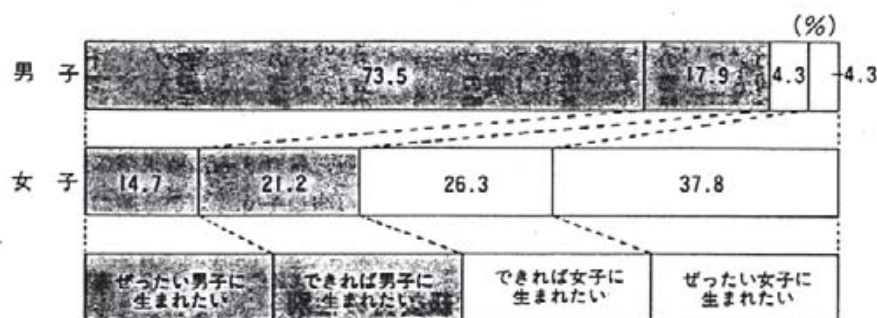
おとなの場合にはとくに女性が、女性役割を受け入れられず、男性への生まれ変わりを望む傾向にあることが、数々の社会学的調査で見いだされている。そして男女間に不平等のある社会ほど、数字が大きなものになって

いるとも言われている。ちなみにわが国では、戦後すぐは7対3ぐらいの比率で男性への生まれ変わりが希望されていたが、最近ではその数字がむしろ逆転している、との報告もある。それだけわが国の女性の社会的地位や家庭内地位が上昇し、女性にも住み易い社会が実現されたのだとも言えるだろう。

では、子どもたちはどうなのか。

図1からわかるように、男子では、「ぜったい男子に」と「できれば男子に」を合わせて91%もが、また男子に生まれたいと考えている。それに対して女子では、また女子に生まれたいと考えている者は、64%にすぎない。この差はどこから出てくるのだろうか。女性という性に生まれたことで、すでに子どもの時代から多くの不利益を被っているためなのだろうか。以後、本レポートを通して、この点を、解明してゆきたい。

図1 生まれ変わり願望



● 学校でリーダーとして

子どもたちの一日の中で重要な意味をもった生活の場、学校。そこで両性は、どう性役

割から自由に暮らしているのだろうか。

図2は、学級委員や班長、応援団や代表選

手など、いわゆるリーダー的な地位についた経験をたずねたものである。この図をざっと見るかぎり、男子と女子に思ったほど大きな体験の差は見られない。しかし、よく見ると

男子は、①学級委員や②学級会の司会などで、わずかに女子を上回っているのに対して、女子は③学級会の書記、④クラスの班長などで、やや男子の体験度数を上回っている。学級委

図2 学校におけるリーダーの地位
～つぎのような学校の仕事を1回以上したことがある～

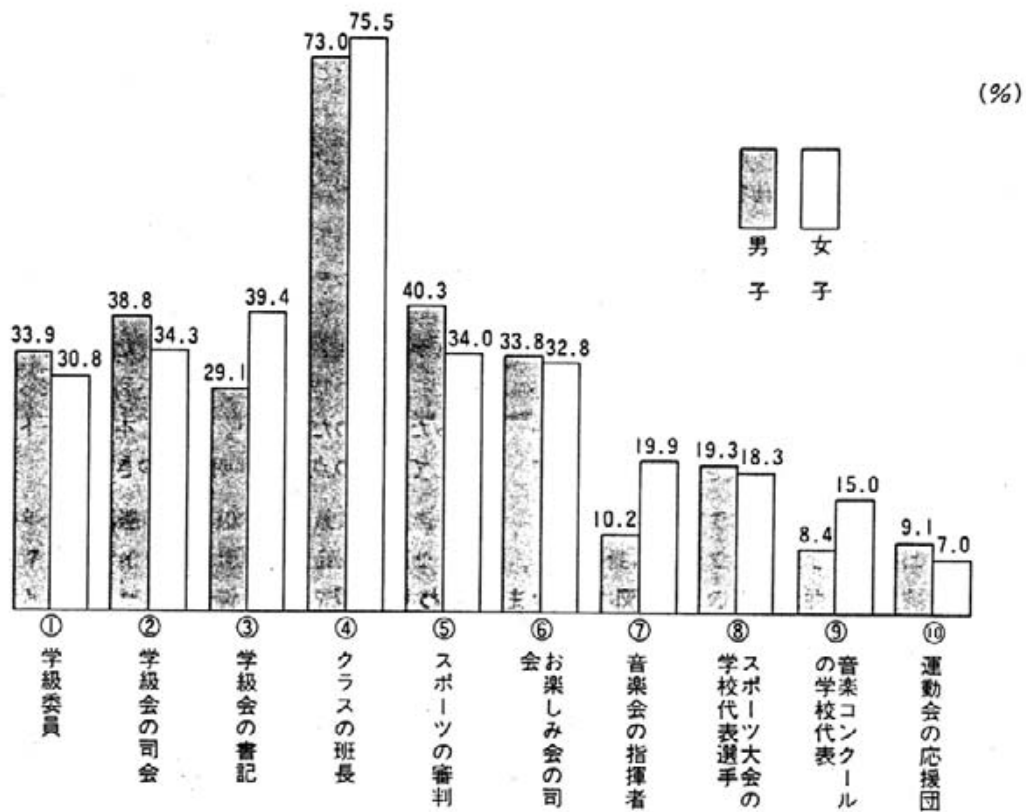


図3 学級委員の性別

	男子 (%)	男子と女子 (%)	女子 (%)
学級委員	56.5	27.0	16.5
副委員	22.3	27.1	44.5
		副委員はいない (%)	
		6.1	

員や学級会の司会をリーダーの中でもビッグなリーダーと位置づければ、書記や班長は、そのつきに来るサブリーダー的な仕事と言えるだろう。すなわち、クラス内での男子はビッグなリーダーに、女子はそれを補佐するサブリーダーにという性役割が見いだされる。

図3を見ると、この点はさらに明らかだ。図は、「現在のクラスの学級委員と副委員が男子か女子か」をたずねたものである。最も

リーダーな地位にある学級委員では、男子が57%を占めているのに対して、女子は3分の1以下の17%でしかない。逆に、二番目の地位の仕事である副委員には、女子が男子の2倍をも占めている。

このように小学校時代から、なんとなく男子のほうがよりリーダーな地位を占めるといふ文化の中で、子どもたちは今も育っているのである。

●学級委員は男子向き？

では、どうして男子のほうが女子よりも多く学級委員になっているのだろうか。今日、先生が男子をよけいに学級委員に指名しているはずはない。多くのクラスでは、子どもたちの互選によって学級委員が選ばれているはずだ。とすれば、子どもたち自身が、学級委員などのビッグな仕事は、男子に向いていると思っているとしか考えられない。

図4は、この疑問に対して答えを与えてくれる。図は、学級委員や書記や応援団などの仕事は、「男子向きか、女子向きか」をたずねたものである。ここで、「学級委員」を男子に向いていると思っている子どもは46%。それに対して女子に向いていると思っている子どもは10%でしかない。「学級会の司会」についても、同様の結果が読みとれる。逆に「学級会の書記」に関しては、女子に向いているとする子どものほうが、はるかに多い。やがて21世紀も到来しようとしている現代、子どもたち自身、まだ学級委員などのビッグな仕事は、女子より男子に向くと思込んでいるとは、なんとも困ったものである。

ここで図4を、もう一度見てみよう。①～⑦の項目では「男子に向いている」とする数値が、「女子に向いている」とする数値を上回っており、子どもたちにとって「男子向き」の仕事、逆に、⑧～⑩の項目では、「女子向

き」の仕事としてとらえられていることがわかる。

男子向きの仕事として並ぶ項目は、先にとりあげたビッグな役割や班長などのほか、スポーツ関係の役割であり、女子向きの仕事は、字を書く役割や音楽関係の役割である。こんな低年齢のうちから、両性の間にこうも明確に性役割が共有されているとは嘆かわしい限り、という気がする。

しかしこうした性役割のとらえられ方には、性差があるかもしれない。ビッグな役割に関しては、両性からお互いに、「自分たち向き」とする見方がされていないだろうか。

表1は、この点を見ようとしたものだ。

たしかに多少その傾向はある。「男子向き」とする数値を、男女で比べてみよう。たとえば「応援団」については、男子のほうは89%と、圧倒的に「自分たち向き」と言っているが、女子は76%とやや下回る。その分だけ「どちら向きでもない」と考える者が、女子のほうに多いのである。このことは、①から⑥まで同様に言える。そして⑦「お楽しみ会の司会」は、男子はこれを男子向き、女子は女子向きととらえ、見方が対立している。そして、⑧から⑩までについては、①から⑥までと逆ではあるが、同じように男子のほうに「どちら向きでもない」と考える者が多いことが見

いられる。

このように多少の性差はあるものの、全体としては図4が示すように、ここでもある種の性別にとらわれた見方——つまり性役割が

存在するのは、たしかなようである。これと同じ傾向は、つぎの図5「係の仕事」にも見られる。

図4 学校の仕事は、男子向きか女子向きか

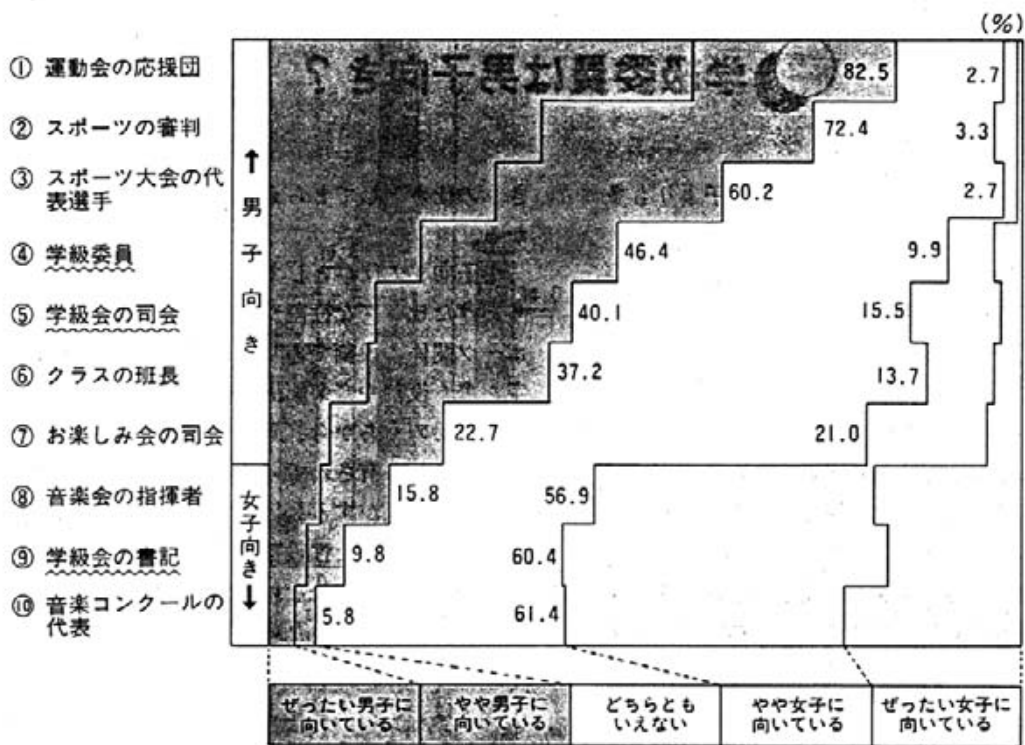


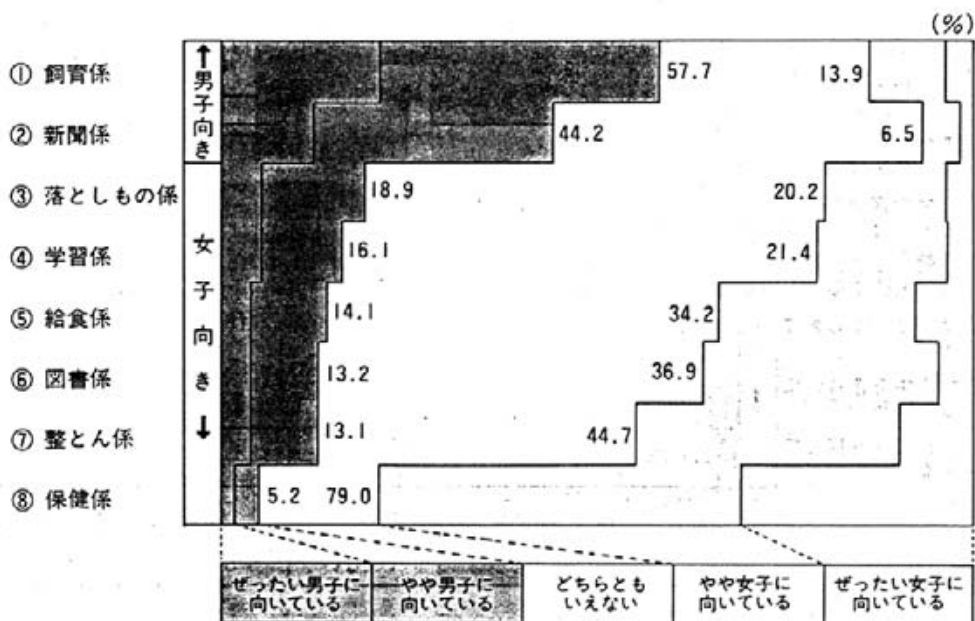
表1 学校の仕事(性差)

(%)

	男 子		女 子	
	男子に 向いている	女子に 向いている	男子に 向いている	女子に 向いている
① 運動会の応援団	88.9	> 1.7	75.8	> 3.7
② スポーツの審判	78.4	> 1.3	66.1	> 5.4
③ スポーツ大会の代表選手	67.9	> 1.5	52.1	> 4.0
④ 学級委員	59.1	> 3.5	32.9	> 16.8
⑤ 学級会の司会	47.4	> 10.1	32.3	> 21.2
⑥ クラスの班長	49.7	> 6.1	24.0	> 21.9
⑦ お楽しみ会の司会	29.5	> 14.2	15.3	< 28.3
⑧ 音楽会の指揮者	19.1	< 50.5	12.1	< 63.8
⑨ 学級会の書記	15.6	< 50.5	3.5	< 75.9
⑩ 音楽コンクールの代表	8.7	< 54.4	2.7	< 68.7

数字は「ぜったい・やや」向いている割合

図5 係の仕事は、男子向きか女子向きか



● 男らしさ・女らしさ

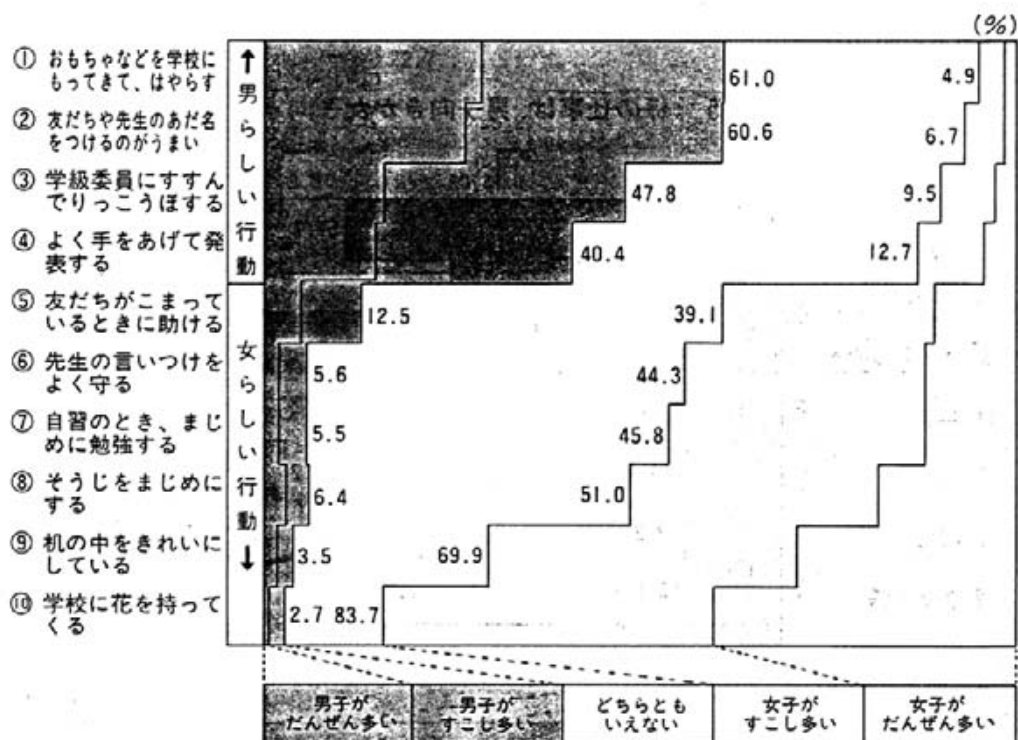
ここでまた別の側面から、子どもたちの性役割観を探ってみることにしよう。

「男の子は活発」「女の子はまじめ」など、男子一般女子一般の行動特徴についてのステレオタイプが、どの社会でも人びとの間に共有されていることは、比較文化論の中で明らかである。わが国でも、この点に関する認識は、昔とそれほど大きくは違ってないという気がする。では子どもたち自身も、そうした性別に伴われるステレオタイプを、すでに自分の中にとり入れているのだろうか。

とりあえずここでは、男子に多く見られる行動を「男らしい行動」、女子に多く見られる行動を「女らしい行動」とよぶことにして、図6を見てみよう。学校で子どもたちが示す行動のうち、一応ポジティブな内容のものを集めてみたものだ。上4つは、男子に多いと子どもたちが判断しているので「男らしい行動」、下6つは女子のほうが多いと判断されているので、「女らしい行動」と名づけておいた。

まず、男らしい行動に目を向けると、①「お

図6 男らしい行動・女らしい行動(長所)



もちゃをはやらす」とか、②「あだ名をつける」などの社交性を示す面があげられている。ついで、③「学級委員に立候補する」とか④「手をあげて発表する」とかいった積極的な点もあげられている。

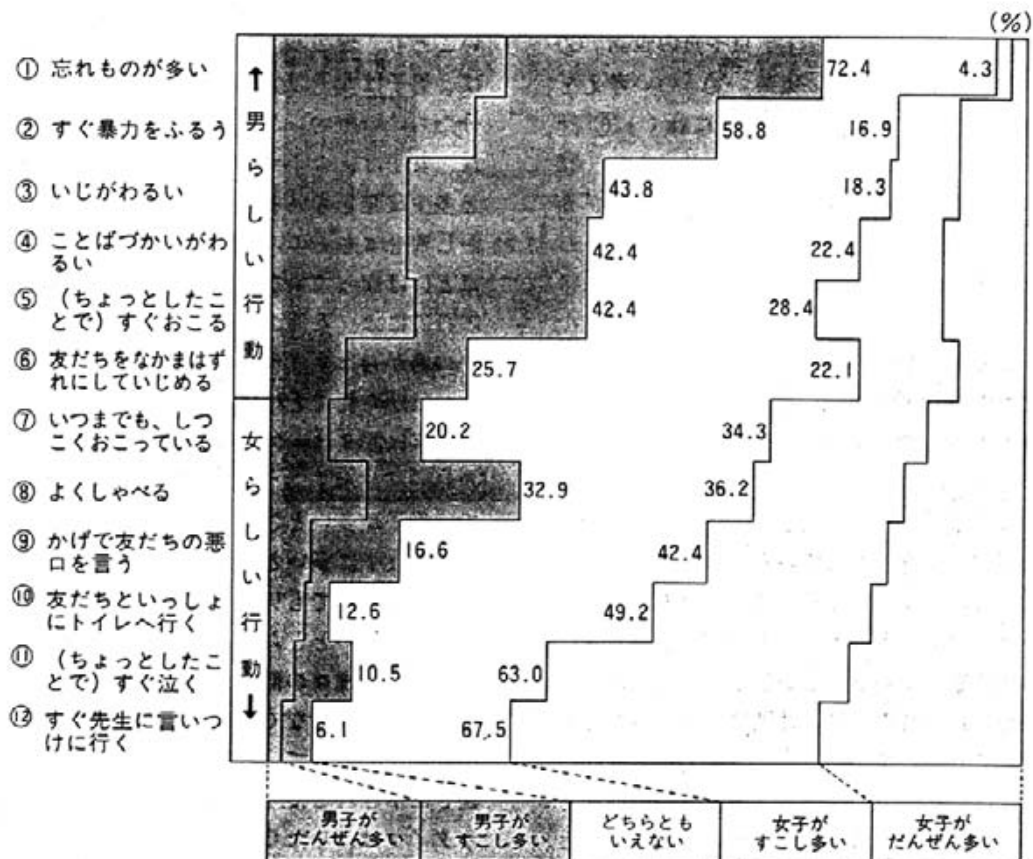
つぎに、女らしい行動としては、まず⑩「学校に花を持ってくる」とか⑨「机の中をきれいにしている」などのきれい好きな点と、⑧「そうじをまじめにする」など、⑥～⑧の項目が示しているまじめさが特徴的だ。

つぎに図7では、男らしい行動・女らしい

行動のうちネガティブな側面を見てみよう。まず男らしい行動としては、図が示すように、①「忘れものが多い」や②「すぐ暴力をふるう」に代表されるような粗野な行動が、これに対して、女らしい行動では、⑫「先生に言いつける」、⑨「かげで悪口を言う」、⑦「しつこくおこっている」など、陰湿な行動のほか、⑪「すぐ泣く」に示されるような弱者としての面もあげられている。

図6図7をまとめて見ると、男子によく見られる行動とは、「社会的で積極的だがやや

図7 男らしい行動・女らしい行動(短所)



粗野な行動」が挙げられ、女子によくある行動としては、「まじめできれい好きだけれども、裏では陰湿で弱者的な面を持つ」ような行動のしかたである。この2つの行動のタイプを比べると、前者は社会へ進出して行くのに都合が良く、後者は家庭にこもるのに都合の良い行動のしかたであると、とらえられそうだ。とすれば子どもたちは、残念ながら、すでに小学生の時代から「男は社会へ、女は

家庭へ」の図式にあてはまった行動のしかたを内側に持っていることになる。これが本当に子どもたちの行動パターンの実態なのか、それとも彼らが、そうしたステレオタイプなわく組で、自分たちの行動を「ゆがんで」とらえているだけなのか。いずれにしても、このあたりの問題点を、もっと掘り下げなければならぬだろう。

●能力・体力のちがい

そうした性的ステレオタイプの背景にあると思われる、男女の能力や体力については、どのようなとらえ方がされているのだろうか。

図8が示すように、①「虫や魚の世話」②「とび箱をとぶ」③「実験」④「いい考えを発表する」⑤「はじめての場所に行く」⑥「計画をたてる」は、男子に得意と考えられ、⑬「きれいな字を書く」⑫「花の水やり」⑪「かざりつけ」⑩「漢字練習」⑨「色の組み合わせ」⑧「作文」⑦「計算」などは、女子に得意と考えられている。ここにも、やり切れなくなるような性的ステレオタイプが、子どもたちの中にあることが見いだされるのである。男子の項目には、向上心や決断、勇気、チャレンジ、能力の高さを示す項目が多く、女子には同じことのくり返し、単純でいいいな仕事、得意とされている。おとなであるわれわれのほうがむしろ、こうした能力のちがいは、性別によるより個人差が大きいことを、日ごろ感じている。しかし子どもたちは、なぜわれわれ以上に、性別にこだわった見方をしている。

こうした一方的な思い込みが、自己概念を作り上げ、自分にできること・できないこと、自分に向くこと・向かないこととして、行動のアウトプットを規定してゆくのであろう。

それが、図6図7で見たような、現実の行動のちがいとなって表れているとも考えられる。

ただしこれらは必ずしも両性の合意ではないことも、表2は示している。表が示すように、男子は女子以上にそれぞれの特性を「自分たちに特徴的」ととらえる傾向が見いだし、女子は、「そうとは限らないじゃない」と多少反発している気配が見いだされる。しかし残念にもその声は弱く、男子を圧倒するほどにはなっていない。性的ステレオタイプの打破には、女性こそ関わらなければ、男性の側からは生まれて来そうもないことが、この表から見てとれる。

つぎに図9は、体力や活動性の差を見たものだ。図が示すように①～③の肯定的な項目では男子が多いとされ、④～⑩の否定的な項目では女子に多いとされている。すなわち、いずれの項目でも男子のほうが体力があり、活動性が高いととらえられている。男子は、女子よりも種々の面で積極的で生産的な能力があるばかりでなく、体力においても優れていると考えられていることがわかる。しかも表3に示されるように、そうした性的ステレオタイプは、やはり男子の中により根を下ろしているのである。

図8 男子と女子の能力評価

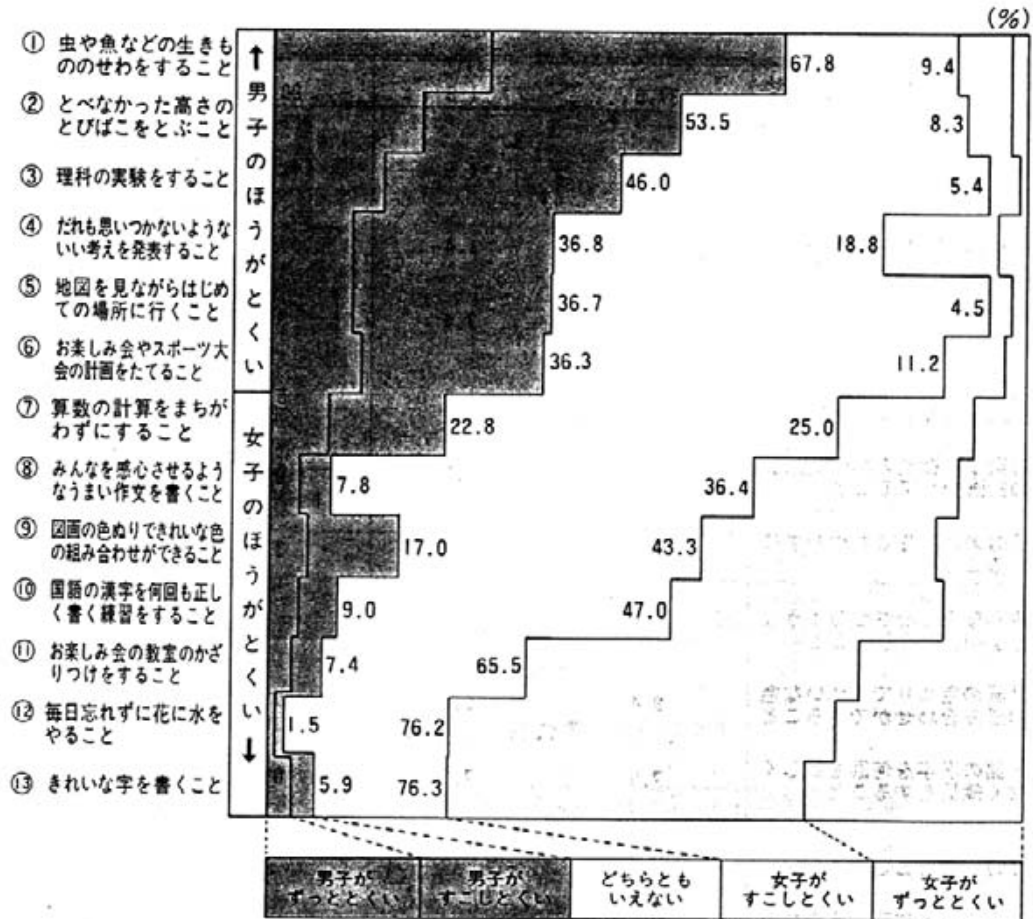


表2 能力評価(性差)

(%)

	男 子		女 子	
	男 子 が ずっととくい	女 子 が ずっととくい	男 子 が ずっととくい	女 子 が ずっととくい
虫や魚などの生きもののせわをすること	37.6	>	1.8	20.1 > 2.9
とべなかった高さのとびばこをとぶこと	26.8	>	1.5	12.2 > 2.8
理科の実験をすること	21.8	>	1.4	7.3 1.3
だれも思いつかないようないい考えを発表すること	15.3	>	3.4	5.5 4.7
地図を見ながらはじめての場所に行くこと	15.9	>	1.2	6.3 1.9
お楽しみ会やスポーツ大会の計画をたてること	18.0	>	1.2	5.9 4.5
算数の計算をまちがわずにすること	11.9	>	6.1	3.2 7.8
みんなを感心させるようなうまい作文を書くこと	4.8		7.4	1.3 < 11.3
図画の色ぬりできれいな色の組み合わせができること	9.4		5.7	0.9 < 18.1
国語の漢字を何回も正しく書く練習をすること	7.5		7.2	0.9 < 14.3
お楽しみ会の教室のかざりつけをすること	18.0	>	1.2	5.9 4.5
毎日忘れずに花に水をやること	1.6	<	23.3	0.1 < 26.4
きれいな字を書くこと	4.5	<	19.4	0.5 < 38.2

図9 男子と女子の体力や活動性の評価

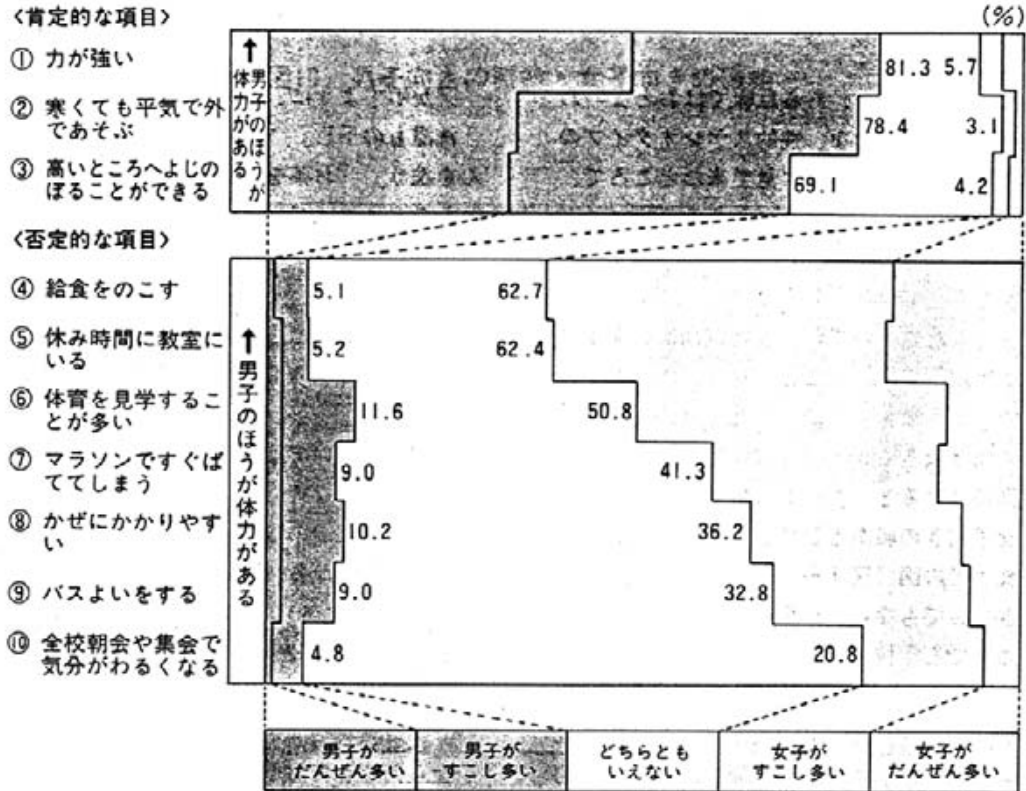


表3 体力・行動力の評価(性差)

項目	割合 (%)	
	男子	女子
「男子のほうがだんぜん多い」の割合		
力が強い	55.5	39.1
寒くても平気で外であそぶ	42.6	22.9
高いところへよじのぼることができる	44.5	18.8
「女子のほうがだんぜん多い」の割合		
給食をのこす	21.0	12.9
休み時間に教室にいる	21.5	13.1
体育を見学することが多い	13.8	6.2
マラソンですぐばててしまう	15.7	6.8
かぜにかかりやすい	11.9	4.5
バスよいをする	6.1	6.9
全校朝会や集会で気分がわるくなる	7.3	2.4

●子どもたちの描く性的将来像

どこから見ても、ある意味ではおとなのわれわれ以上に強力な、性的ステレオタイプの存在を子どもたちの中に見て来たところで、目を子どもたちの将来に転じてみよう。子どもたちは、自分の将来を性別との関わりで、どうとらえているのだろうか。

子どもたちはいずれ、近い将来に何らかの職業選択を迫られることになる。その際に、性的ステレオタイプがあるとすれば、その選択の幅は大きく狭められることになる。

図10によると、①～⑥は男子向き、⑦～⑪は女子向きの職業としてとらえられ、しかもこれまでの図(図4～図9)に比べると、最も「どちらでもない」が少なくなっている。

ここでも学校内の仕事に見いだされたように、「総理大臣」「校長」「医者」「パイロット」のようにリーダー的役割、社会的地位の高い仕事、むずかしい技術を要する専門的な仕事が男子向きとされ、女子向きには、それほどむずかしい技術を要しない仕事や、同じ教員でも、幼稚園の先生のように幼い子を扱う仕事、芸術関連の仕事などが挙げられている。

ではもっと具体的に、生活に密着した領域での行動様式についてはどうか。図11は、おとなの男性・女性がしている行動のうち、「みっともない」と感じるかどうかをたずねたものである。ここで「みっともない」という判断は、①性役割からはみ出した行為として、②性役割にかかわらず人間として下品な、もしくは価値的でない行為として、の両面からとらえられそうだ。

図が示すように、「ぬかみそをかきまわす」「洗濯もの干し」「赤ん坊をおぶう」「茶わんを洗う」「お茶をいれる」「八百屋での買い物」については、女性がしていてもかまわれないが、男性がするとみっともないと感じる子どもたちが、それぞれの項目に、まだけっこう多く見いだされるのである。

また「ごはんのお代わり」「パチンコ」「朝寝」「飲酒」「喫煙」「プロレス」「けんか」などについては、男子についても一定数の「みっともない」と判断する者たちがいるが、とくに女子の場合は大きな割合を占めていることがわかる。「ごはんを何ばいもお代わりする」については46%が、「パチンコ」51%、「朝寝」52%、「飲酒」54%、「喫煙」56%、「女子プロレス」58%、「とっくみあい」68%と、その数字は大きい。つまり、男子なら何をしてもさほどみっともなくないが、女子がすると非常にみっともないと感じる。性的なサンクション(禁忌)が、子どもたちの中にきわめて強いことがわかる。これでは女の子たちの行動が大きく制約されるだろう。くり返しになるが、その大きさは、われわれおとな以上かもしれない。

しかも、表4に示すように、そうした反応は男子だけのものではない。この表は、男女差が少ない点で、これまで見てきたデータと違っている。たとえば、パチンコについては、女性がするとみっともないと思う男子は52%いるが、女子のほうも49%と、かなり両者の数字は近づいている。他もほぼ同様なのである。

図10 男子向きの職業・女子向きの職業

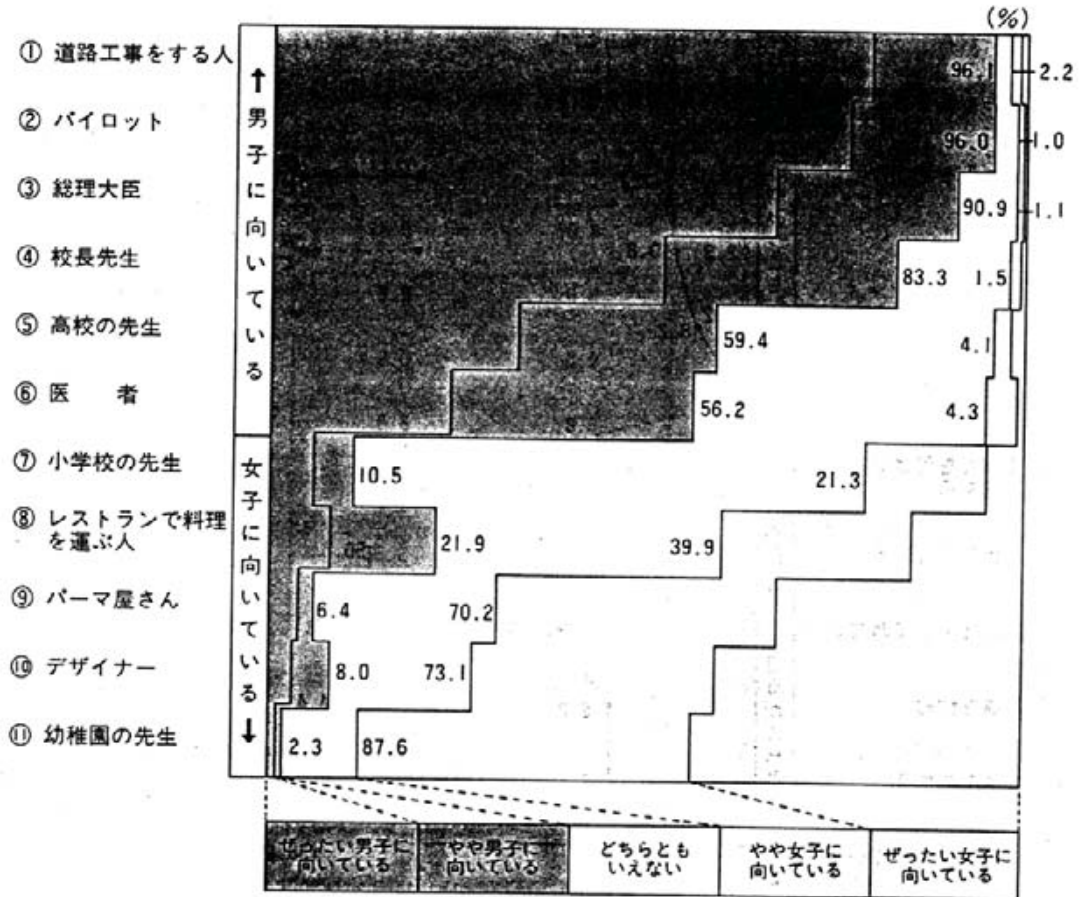


図11 とてもみっともないと思うこと

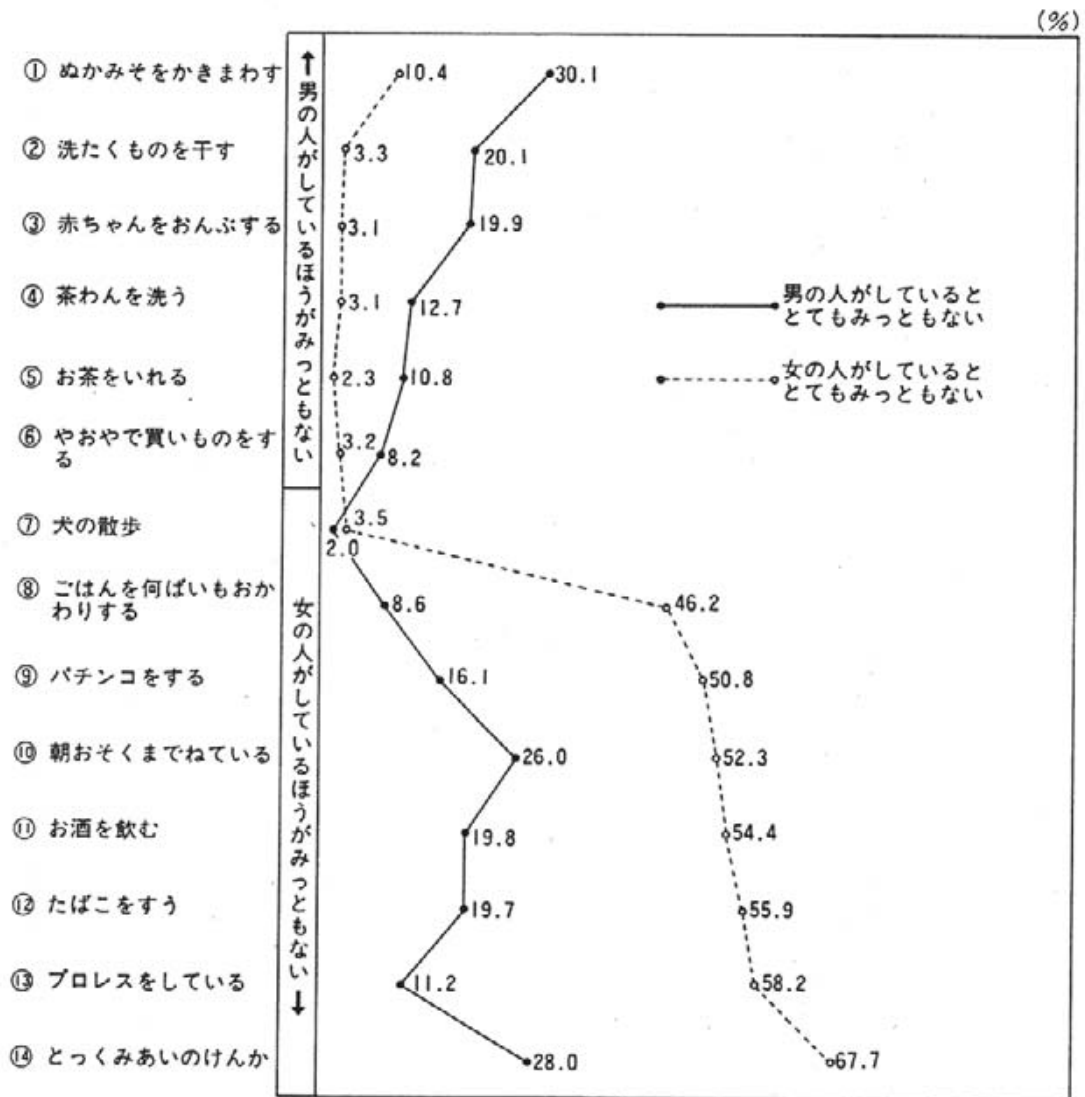


表4 職業評価(性差)

	(%)			
	男の人がしていると、とてもみっともない		女の人がしていると、とてもみっともない	
	男 子	女 子	男 子	女 子
① ぬかみそをかきまわす	29.5	30.7	14.0	6.6
② 洗たくものを干す	21.2	18.9	5.4	1.1
③ 赤ちゃんをおんぶする	22.0	17.7	5.3	0.8
④ 茶わんを洗う	13.1	12.2	4.6	1.5
⑤ お茶をいれる	11.0	10.6	3.8	0.7
⑥ やおやで買いものをする	9.9	6.4	5.4	0.9
⑦ 犬の散歩	3.0	0.9	5.8	1.1
⑧ ごはんを何ばいもおかわりする	8.6	8.5	53.1	> 38.9
⑨ バチンコをする	15.8	16.5	52.4	> 49.0
⑩ 朝おそくまでねている	26.2	25.8	56.5	> 47.8
⑪ お酒を飲む	20.7	18.9	58.6	> 49.8
⑫ たばこをすう	21.0	18.2	59.3	> 52.3
⑬ プロレスをしている	11.5	10.8	61.4	> 54.7
⑭ とっくみあいのけんか	25.1	30.9	69.4	> 65.9

● 男子に生まれ変わりたい理由

この章を終わるに当たって、ここまでのレポートを簡単にまとめてみよう。はじめに、男子よりも女子のほうが異性に生まれ変わりたいと思っていることを報告したが、その気持ちもわかるような気がする。学級委員のようなリーダー的な仕事は「男子向き」だと考えられているし、生産的な能力や体力でも男子のほうが上だと思われている。そして、その当然の結果として将来の職業像も、男子向

きのほうがはるかに価値的で、社会的地位の高いものが考えられている。これでは、男子に生まれたいと思うのは当然のことだろう。人生の入り口に立ったばかりで、自己形成も含めてすべてこれからの子どもたちが、すでにこのように性役割にとらわれた考え方や態度をもち、しかもとくに女子にとっては大きなハンディキャップとして作用しそうな状況は、なんとも残念である。

2. 作られる性役割観



● 性役割の意味

前章で見てきたように、子どもたちの中にはある意味でおとな以上に強固な性役割が共有されており、それがとくに女子に不利に働いている気配が感じられることを、指摘してきた。こうした性役割はどのように子どもたちの中に育ってゆくのか。この点は発達心理学上の大テーマであり、これまでに少なからぬ数の研究者が関心を示してきた。

改まって言うなら、「性役割」とは、その社会の中で生まれ、多くのメンバーに共有され、つぎの世代へと伝達されてきた「文化」の一側面である。子どもたちは、こうした文化の中に生まれ、両親やそのおとなたちから、これを受け継ぐ。性役割は別の言葉で言えば、男らしさ、女らしさであり、子どもの社会化に際して一つの軸となる。男の子は男の子としての性格や行動様式を、女の子は

女の子としてのそれらを身につけることが、成長の一つの側面でもあり、社会適応の一つのパターンでもある。

しかし性役割は、人間が選択できない「性別」という生物学的な「地位」に対して、社会的に期待される行動様式であるため、あまりにこれがきつすぎるとは、個人の生き方を不自由なものにしてしまう。人は男性か女性であると同時に、1人の人間でもある。それぞれの自己実現に当たっては、人間としての要求と男性もしくは女性としての要求が1人の個人の中で調和的に満たされなければならない。そのためには、性役割は、生まれつきの性別に割り当てられているがゆえに、できるだけゆるやかで、人を拘束しないものでなければならないだろう。

最近わが国の性役割の内容は、しだいにゆ

るやかで、接近したものになってきている。服装を例にとっても、30年前に、ピンクのシャツを着た男性などは、およそ考えられない存在であっただろう。

しかし現代でも性役割は、ゆるやかになっただけで、まったくなくなってしまったわけではない。性役割がある以上、おとなはこれを次世代に伝達し、性的社会化をはかろうとする。

本レポートで見てきたデータは、今日、子

どもたちの中に、かなり強固に——過剰とも言えるほどに、性役割が共有されていることを示していた。ではそうした態度は、どのように作られたのか。ここでは、先生と両親という身近なおとなにしぼって、その影響力を見てみよう。いわば、身近なおとなの発言やしかり方の中で、子どもは性役割を十分にも不十分にも受け入れるようになるという仮説をたてて、これを確かめてみる作業にとりかかろう。

先生のしかり方のちがい

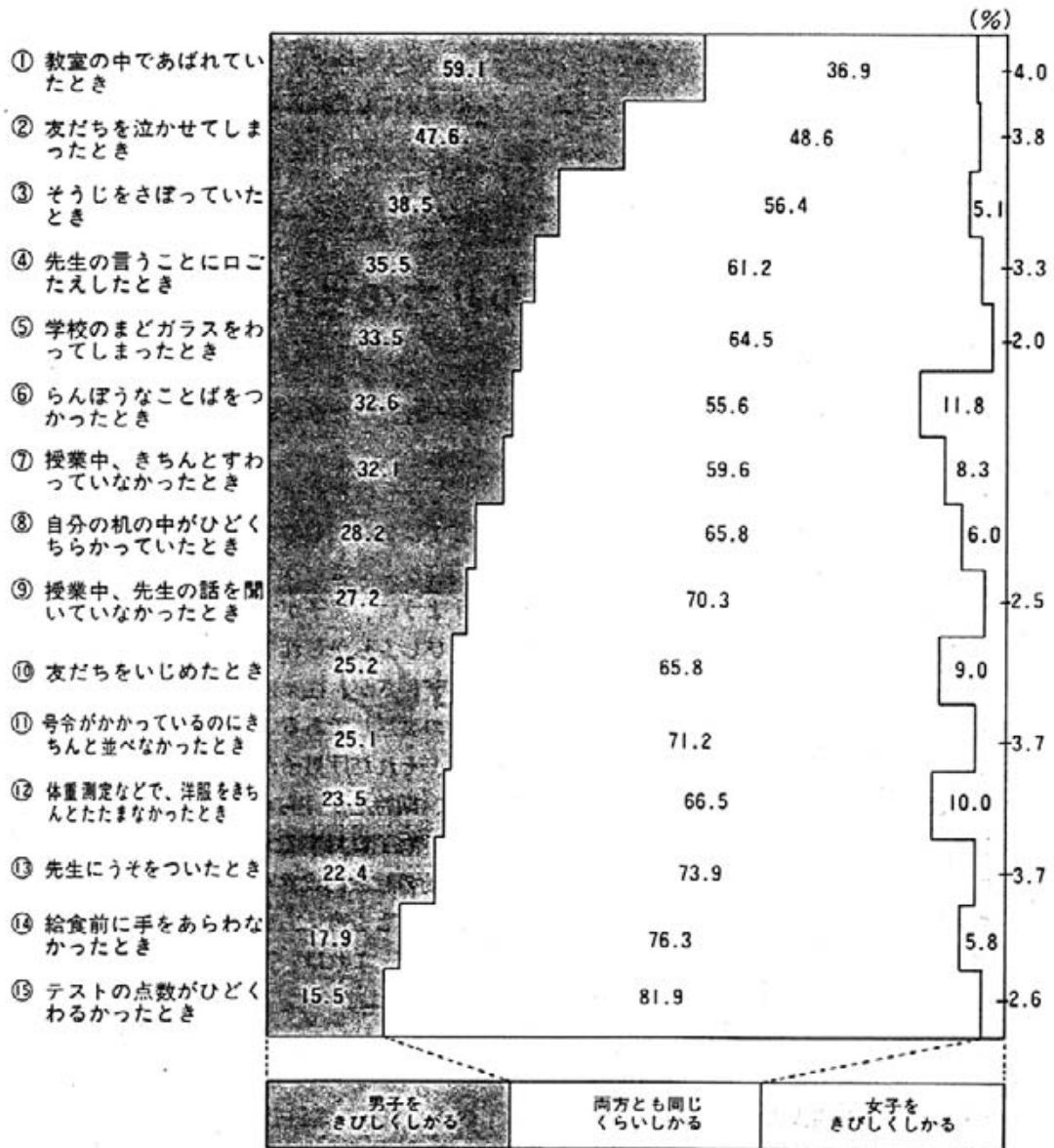
教師の役目の一つは、子どもをしかることであろう。望ましい、身につけさせたい行動はそのままに、望ましくない、身につけさせたくない行動についてはこれをしかる。子どもはしかられることを通して、自分が周囲から何を期待されているのかを知り、自己形成の方向を見いだすことができる。では先生は、学校で子どもの何をしかっているのだろう。男子と女子でしかる内容にちがいがあるのだろうか。もしあるとすれば、それが性役割を過剰に成立させる結果を生み出しているのかもしれない。まず図12は、男子と女子に対する先生のしかり方にちがいはないか、調べたものである。

図が示すように、①と②の項目を除けば、「両方とも同じくらいしかる」が5-8割に達しており、やはり教師が、性別によって差

をつけない教育をと心がけているようすがわかる。

しかし内容によるしかり方の差は、全体としては少ないものの、しかり方がどちらか一方に片よっているとするとする者の中では、図が示すように、男子がすべての項目で、女子よりきびしくしかられている気配である。しかしきびしさが、往々にして無意識のレベルで期待の裏返しであることを考えると、この結果は、それだけ男子が社会的成熟を遂げるように、期待をかけられている結果だともとれよう。女子に対する一種の甘やかしが、後日、女子の社会的成熟をはばむ一つの要因となっているとも考えられる。なぜかそう言われてみると、これは、微妙な部分で思い当たる気もする。

図12 男子と女子に対する先生のしかり方



男女を区別する発言

性役割の形成に当たって、もっと直接的な発言のしかたがある。「男は——」「女は——」とか、「男のくせに——」「女のくせに——」などの言い方がそれで、この間の戦争が終わるまでは、日常のおとなたちの口をついて出たものだった。この点は、最近どうなっているのだろうか。

図13は、男女を区別するような先生の発言を、どれくらい聞いたことがあるかたずねたものである。①～③の項目は男子に対しての発言であり、④～⑥の項目は女子に対しての発言であるが、その差はあまりない。しかり方のように、男女のうけとめ方の違いも、図

14に示したようにほとんど見られない。

しかし、ここでもう一度、図13に目を移してみよう。「数えきれないほど聞いた」という数値と、「何回か聞いた」という数値を加えると、男女を区別するような発言を3割～5割の子どもたちが、ある程度聞いていることになる。性役割をはみ出した行動のしかたをした時、先生の口から出たものであろうが、しょっちゅうではないまでも、折々はこうした発言が、教師の口から出ることがあるのは確かだろう。それが性役割の形成にどう関わっているかは、後でクロス集計で確かめてみたい。

図13 先生の発言と性役割

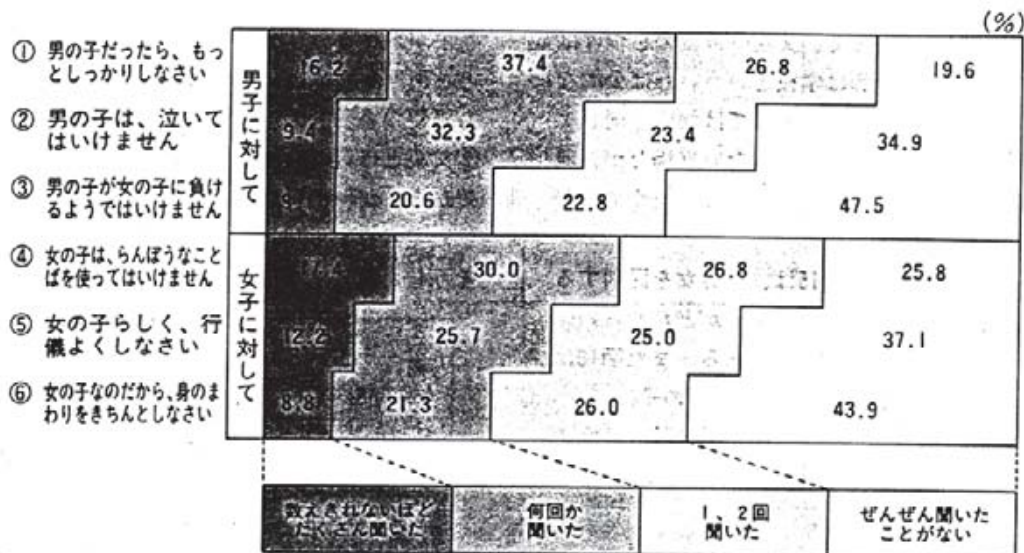
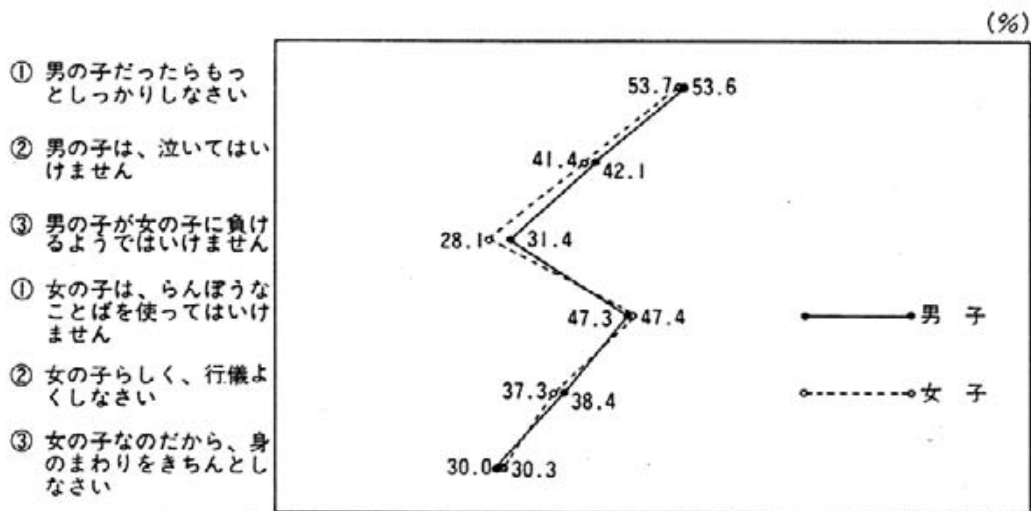


図14 先生の発言(性差)



※数値は「数えきれないほど」と「何回か」を加えたもの

● 親たちのしつけ

では家庭にあって、父親や母親のしつけはどうか。教師は学校といういわば公的な場において、たてまえとしては両性を同じようにとり扱わなければならない立場だが、親たちはもっと自由である。本音も出やすいだろう。

図13と同様に、図15は、「男女を区別するような父親の発言」を子どもがどれくらい聞いているかたずねたものである。また図16は、母親の発言についてである。「男の子は——」タイプの発言については男子の数値、「女の子は——」タイプについては女子の数値を使用して作図してある。

図が示すのは、①「数えきれないほど」言われた子は、先生の場合より、父親母親から言われた場合のほうが多い。一部の親たちは、公的な場でないだけに、伝統的な性役割にそったしつけをかなり強固に押し進めているよ

うすがわかる。しかし「数えきれないほど」と「何回か」を合わせた数字は、教師の場合も両親の場合も大差のないものになっている。②父親と母親の性役割的発言の度はさほどの差がないが、母親は娘に対して父親よりそうした発言をする傾向が見られる。一度も娘にそうした発言をしたことがない親は、下のよ

(%)	父親	母親
身の回りをきちんと	30.4	> 17.2
ぎょうぎよく	28.3	> 19.0
言葉づかいに注意	33.5	> 23.3
家事手伝いせよ	42.6	> 35.4

うになっており、父親は息子をそれほど「男らしく」しようとはしていないが、母親は娘を多少とも「女らしく」育てようとしている傾向が表れている。

図15 父親の発言と性役割

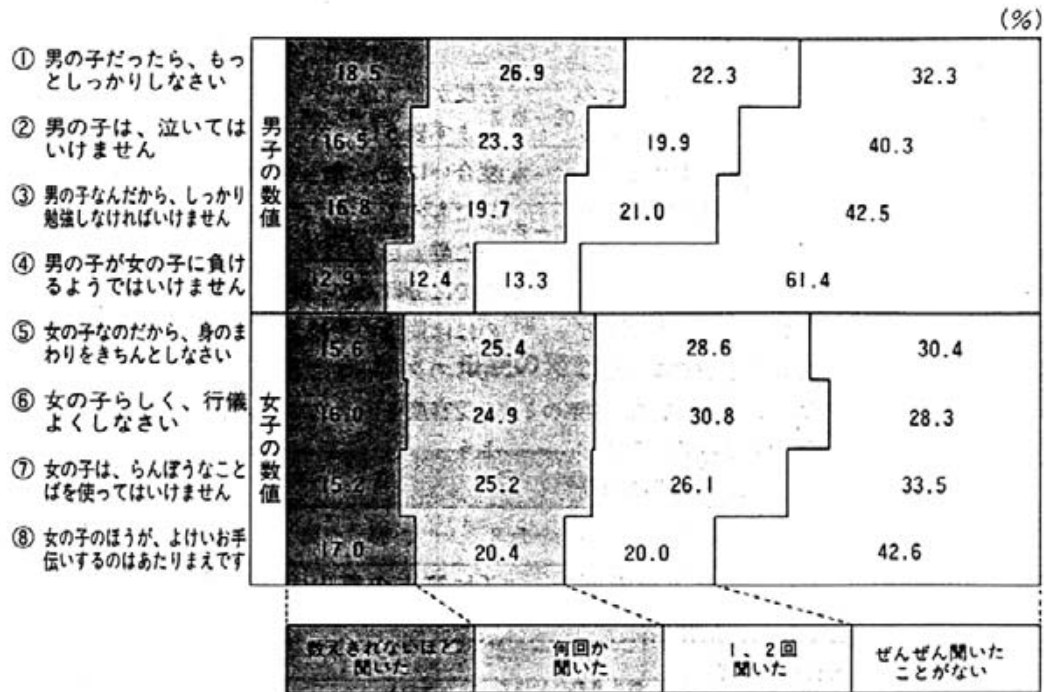
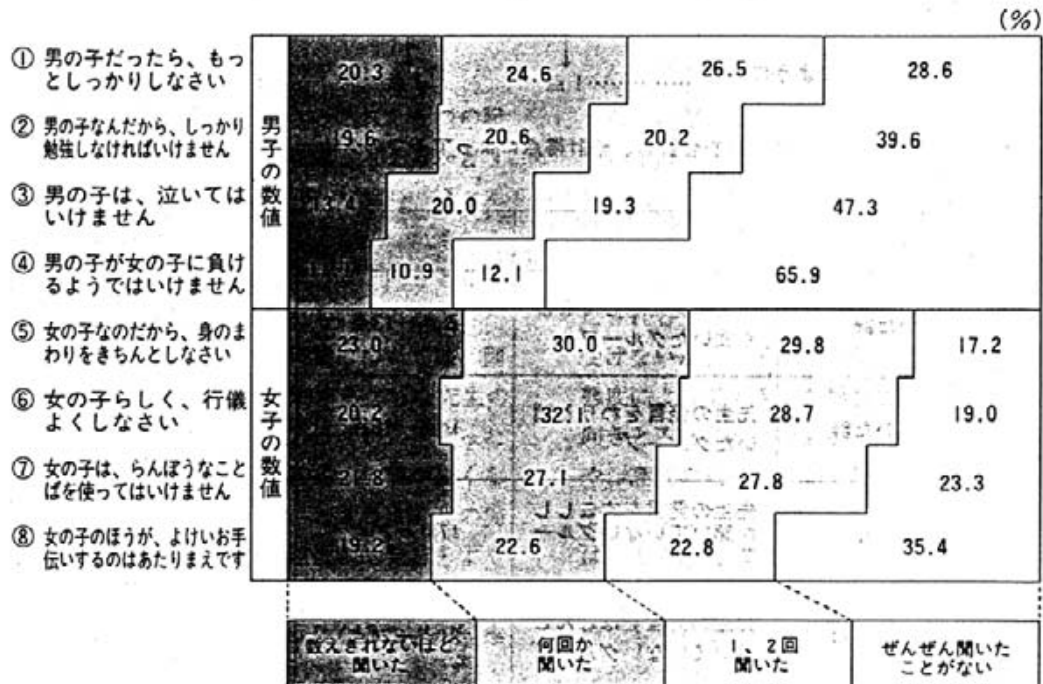


図16 母親の発言と性役割



おとなの発言の影響力

さて性役割が一つの文化だとしたら、その受け入れの度合いには、むしろ個人差があるはずだ。その文化を熱心に伝達しようとする社会とそうでない社会に育った者とは、その受け入れ方が違ってくるだろう。それぞれの家庭やクラスにおいて、男女を区別してとり扱おうとするおとながいれば、当然子どもは性役割にそった自己形成をしてゆくだろう。そこで、先生や親たちから、たびたび男女を区別してとり扱う発言を聞いている子どもと、そうでない子どもとは、性役割の受

容度がどう違うかを見てみることにしよう。

まず表5は、性別を区別する発言を聞いた度合いに従って、全体を4分した手続きを示したものである。このようにして、「よく聞いた群」から「ほとんど聞いたことのない群」までに分けたが、表6、表7も、両親についてのほぼ同様の手続きを示したものである。これらのグループごとに、1章で示した性役割の受容度をクロスさせた結果をつぎに見てみよう。

表5 先生の発言スケール(加算点の算出方法)

図13の①～⑥の6項目を用いて

	数えきれないほど たくさん 聞いた	何回か 聞いた	1、2回 聞いた	ぜんぜん 聞いたことが ない
① 男の子だったらもっとしっかりしなさい	1	2	3	4
⑥ 女の子なのだから身のまわりをきちんとしなさい	1	2	3	4

※各項目について右のように得点化する。

※さらに、各回答者ごとに得点を合計し、合計得点によって4つのグループ(群)に分ける。

グループ名	属性	得点	全体に対するグループの割合
よく聞いた群	先生の発言をととてもよく聞いたグループ	6点～13点	23.2%
わりと聞いた群	先生の発言をわりと聞いたグループ	14点～16点	23.1%
すこし聞いた群	先生の発言をすこしか聞いていないグループ	17点～20点	29.2%
聞いていない群	先生の発言をほとんど聞いていないグループ	21点～24点	24.9%

表6 父親の発言スケール

※図15の①～⑧の8項目を用いて、表5の手法によって4つのグループに分ける。

グループ名	得点	全体に対する グループの割合
よく聞いた群	8点～20点	25.7%
わりと聞いた群	21点～25点	22.7%
すこし聞いた群	26点～29点	25.0%
聞いていない群	21点～24点	26.6%

表7 母親の発言スケール

※図16の①～⑧の8項目を用いて、表5の手法によって4つのグループに分ける。

グループ名	得点	全体に対する グループの割合
よく聞いた群	8点～19点	20.6%
わりと聞いた群	20点～24点	25.5%
すこし聞いた群	25点～28点	25.8%
聞いていない群	29点～32点	28.1%

職業に関する性役割との関連

図17～図19は、男子向きとされた6つの職業について、男子向きの職業と考えるかどうかを「性役割的発言をよく聞いた群」「ほとんど聞いていない群」との間で比較したものであり、同様に図20～図22は、女子向きとされた4つの職業について見たものである。

まず男子向きとされた職業については、図が示すように、男女を区別するような先生の発言を「よく聞いた群」のほうが、「ぜったい男子に向いている」と答える数値が高くなっており、図20の女子向きとされる職業の場合も同様である。つまり性役割的発言をよくする担任の下では、子どもも職業に関する性役割を強く身につけるようになることが、推定される。

つぎに図18と図21は、父親の態度の影響を

見たものだ。おもしろいのは男子向き職業については、父親の発言はほとんど影響力がない。女子向き職業については、先生の場合と同じくらいの影響が見いだされる。

同様なことが、図19と図22についても見いだされる。男子向きの職業はほとんど影響を受けないが、女子向き職業の見方は、母親の態度によって大きく影響を受けている。女子向きとみなされた職業が、比較的単純な作業や、高度の技術を必要としないタイプのものであることを考えると、こうした両親の態度は、とくに女子の能力をどう評価するかに影響を及ぼすことがわかる。男の子はどんな環境でもそれなりに育つが、女の子がうまく育つかどうかは、環境に左右されると言えそうだ。

図17 男子向きの職業×先生の発言スケール

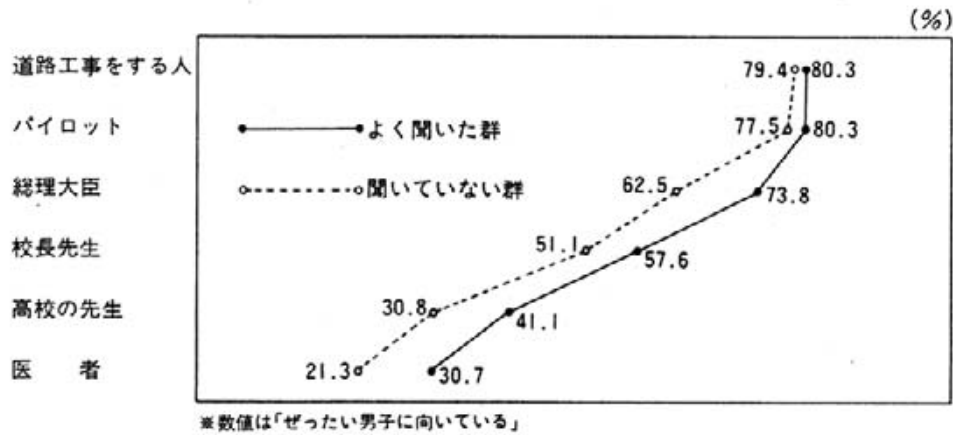


図18 男子向きの職業×父親の発言スケール

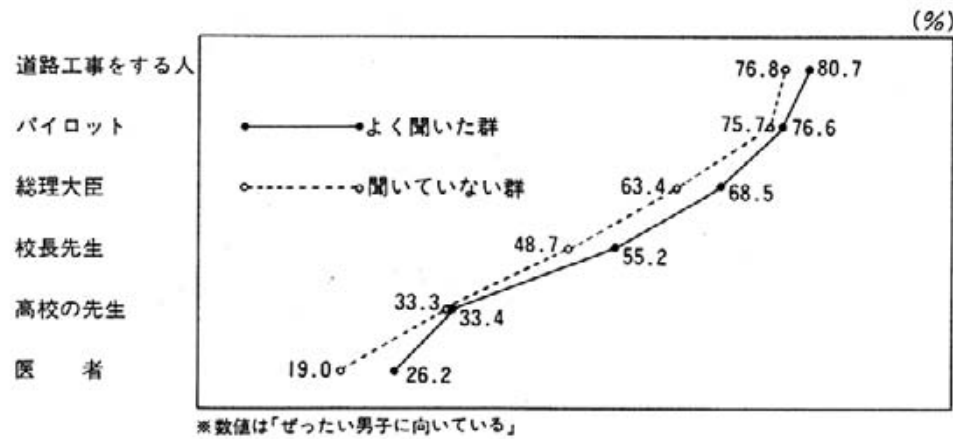


図19 男子向きの職業×母親の発言スケール

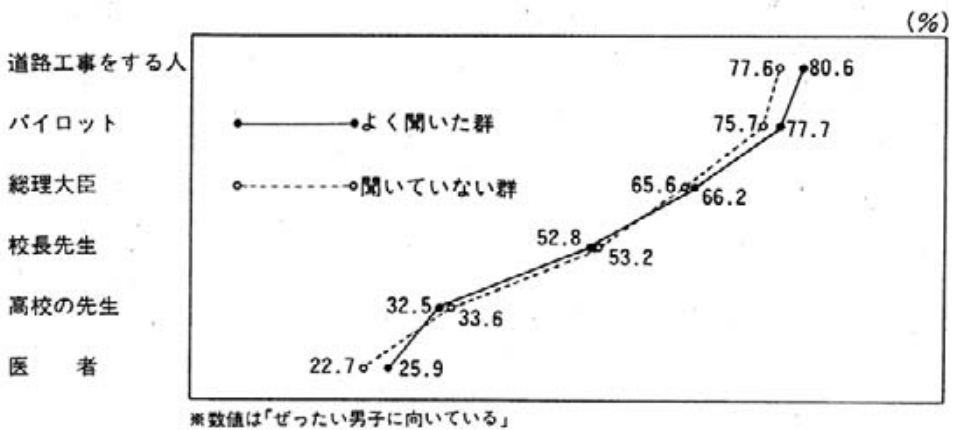
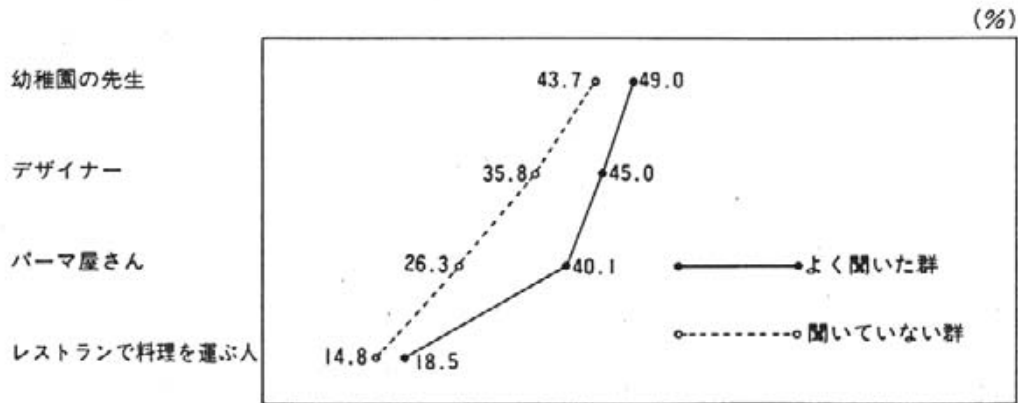
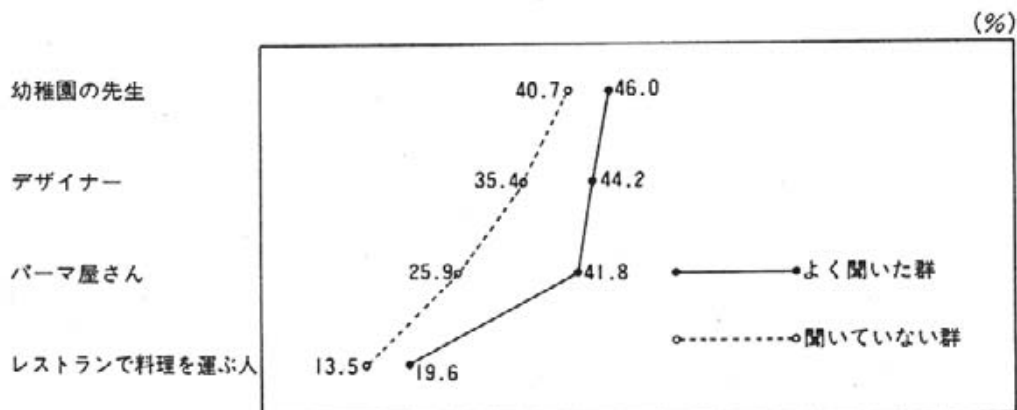


図20 女子向きの職業×先生の発言スケール



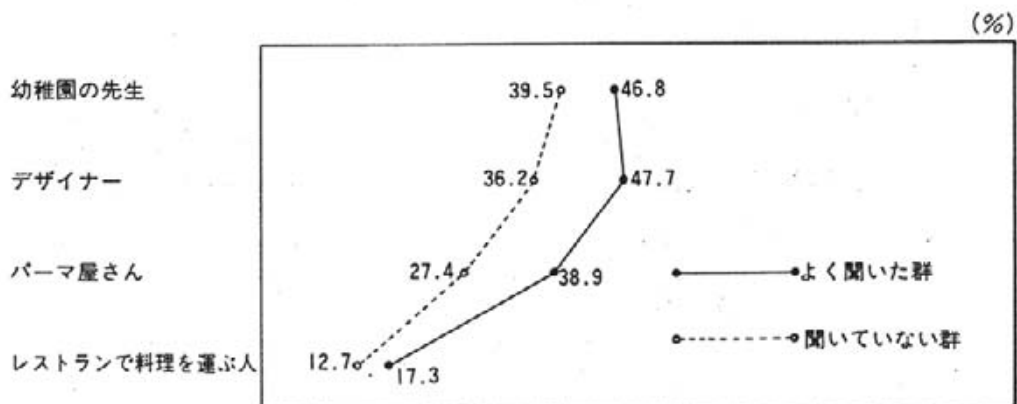
*数値は「ぜったい女子に向いている」

図21 女子向きの職業×父親の発言スケール



*数値は「ぜったい女子に向いている」

図22 女子向きの職業×母親の発言スケール



*数値は「ぜったい女子に向いている」

能力観への影響

では、男女の能力をどう評価するかと、性役割に関わるおとなの態度との関連はどうか。

ここでは、先生の発言、父親の発言、母親の発言の3つの中から、最も影響力が大きかった

図23 男子のほうが得意だと思うこと×先生の発言スケール

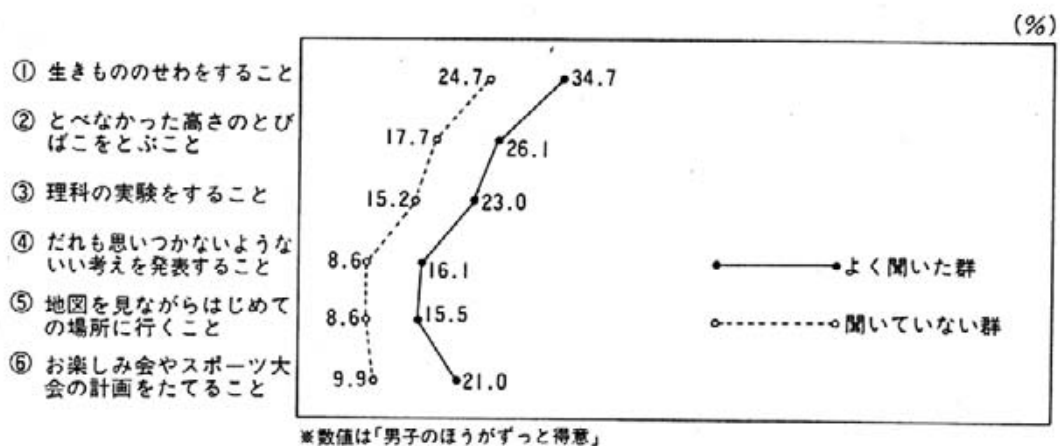
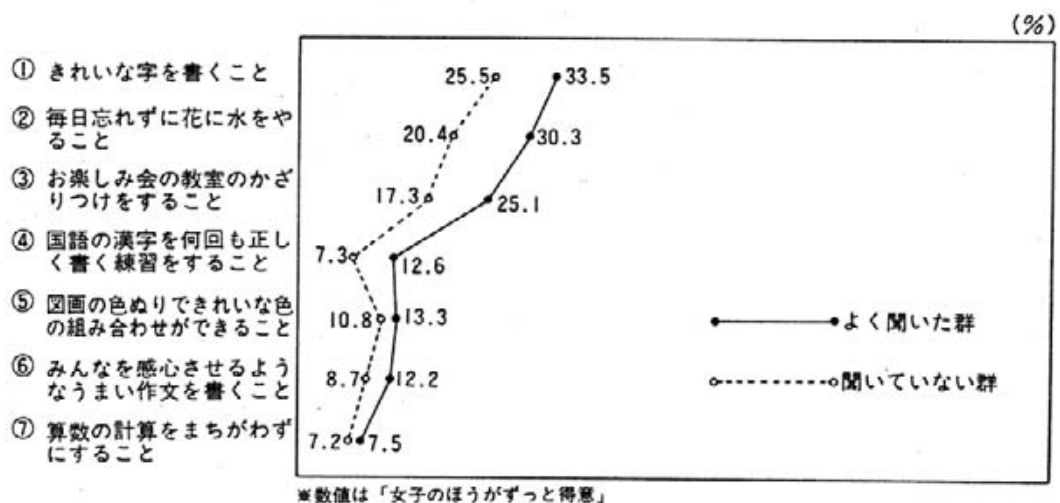


図24 女子のほうが得意だと思うこと×先生の発言スケール



た先生の発言の影響力を見てみよう。(父親、母親については、巻末の集計表参照)

図23、図24は、男女の能力評価との関連を見たものだ。ここでも先の職業についてと同様な結果が見いだされる。教師の立場にある者は、日ごとくに子どもたちに伝統的な性役割を強化しないように配慮して発言すること

が望まれよう。

また図25、図26の結果もまったく同様である。教師の性役割の受容度が、子どもたちの現在から将来にわたる広い範囲の態度形成に影響を与えることを、くどいようだが十分認識してほしいものである。

図25 男の人がしたほうがみっともないと思うこと×先生の発言スケール

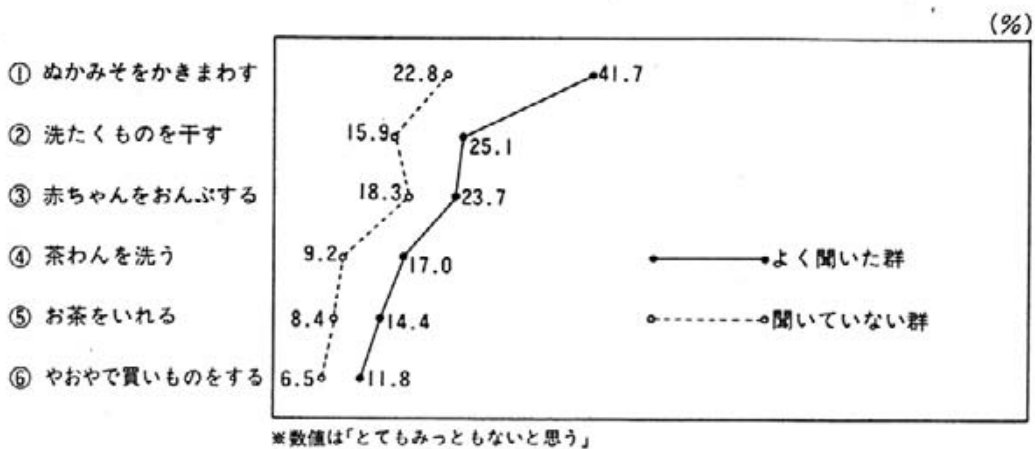
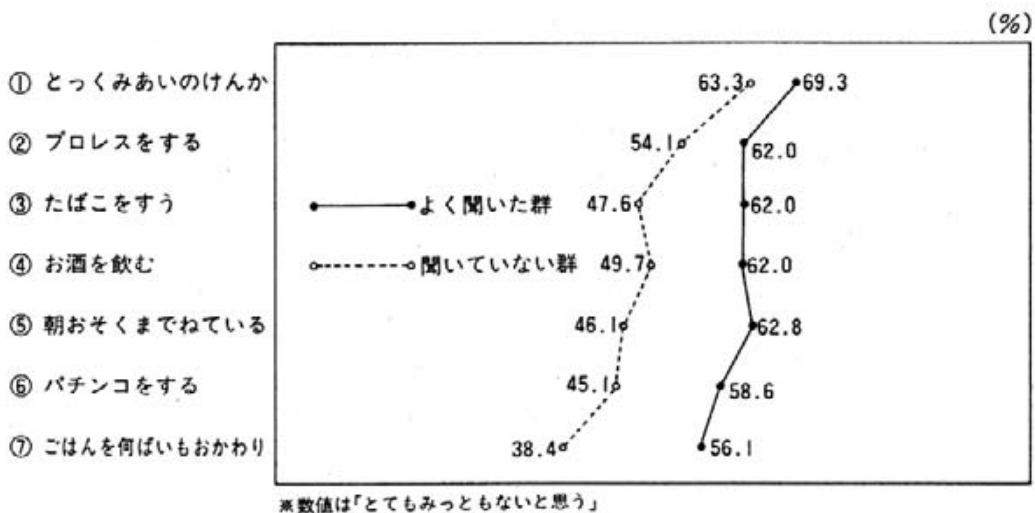


図26 女の人がしたほうがみっともないと思うこと×先生の発言スケール



ま　と　め　に　代　え　て

人類の歴史のあるところ、「男らしさ・女らしさ」の概念は、あらゆる時代、あらゆる社会を越えて存在していたに違いない。長い間人びとは男らしさ・女らしさを、生まれつきのもの、生物学的・生理学的性差を基盤とした、変更のきかないものと考えてきた。しかし20世紀に入って、文化人類学者のマーガレット・ミードや、心理学者のターマンらが発表した研究が、その考え方を大きく変えることになった。男らしさ・女らしさの概念が、現存する社会の中でも内容を異にしていたり、また性度スケールを用いて測定すると、年齢や教育、職業などによって、性度がかなり大きな差を見せることや、またその個人差が大きいために、つぎつぎと研究者たちに明らかにされるようになって、人びとは「男らしさ・女らしさ」を生まれつきのものから、学習されたもの、身につけたものとみなすようになってきた。

「性役割」(セックス・ロール)という硬い用語が25年前は心理学や社会学の文献の中でしか使われなかったのに、最近ではそれ

が新聞や雑誌、人びとの話し言葉の中でひんぱんに使われるようになった。時代は、男らしさ・女らしさの考え方を大きく変えたのである。

しかし、性役割を論じるとき、どうしても未解決で重要な問題につきあたる。両性間の行動や性格や能力の違いを、すべて「性役割」つまり「獲得され、学習された行動パターン」とみなしてよいのかどうか、という問題である。これらがいくぶんかは、生理的・生物学的基盤の上に立つ差異である可能性は、十分に残されている。しかしそれがどのくらいの規定力をもつのかについては、現在、研究者たちをはじめとして、誰も答えをもっていない。

もう一つの問題がある。性役割は、人びとが両性の上に期待する行動パターンの総和である以上、これを過大に期待することは、むしろ、それぞれの人びとの生き方の個人差を無視することとなる。ターマンの研究をひくまでもなく、男性でもかなり女性的な男性もいれば、きわめて男性的な男性もいる。女性も同じである。加えてそれぞれが、どの程度

男性らしくありたいと思うか、女性らしくありたいと思うか。その幅も方向もさまざまである。性別という生まれながらの「地位」は変更ができない以上、それぞれの性別をもつ人びとに対して、こうあってほしいとする社会的期待はできるだけゆるやかなほうがよい。

しかし性役割がまったくなくなったほうがよいかと言うと、そうとは言えないだろう。人びとの生き方を不自由にするほど性役割が過大であってはいけないが、人生の色どり、味つけ程度にはあってもよいのではないか、という気もする。人類は男性と女性とで構成されているのだから、それぞれお互いが魅力を感じ合う程度の特色は残しておいたほうがよいのではないかと思う人びとも多いだろう。つまりセックス・アピールの問題である。

このへんはもっと詳細に論じたいところだが、紙面がない。中途半端ではかえって誤解を招きそうなので、ここで止めておこう。しかし「個人を拘束し不自由にするほど、性役割が強固であってはいけない」点に関しては、ほとんどの人の合意が得られるだろう。そこで、これを前提にして、本レポートのデータをふりかえてみるとどうなるか。

残念にも、われわれよりずっと自由で新しい態度をもっているはずの子どもたちの中に、ある意味ではわれわれ以上に伝統的な性役割

観が存在することを、いくつものデータからかいま見てきた。これは「人生の色どり」などというものではない。明らかに、個人の自由な生き方、人生における自由な選択をはばむような大きさをもっていると言わざるをえないだろう。

しかもそれが、まわりのおとな、ここでは先生と両親の影響下に生み出されることも、やはり数々のデータが示してくれたとおりである。

しかしこのような子どもたちの保守的な態度を作り上げたのは、実はわれわれの裡にひそむ前世紀的な性役割観にもよるところが大きいのではないかと、反省もさせられる。かつて「私作る人、あなた食べる人」のCMが、性役割を強化するとして消費者団体の指摘を受け、スポンサーがこれをひっこめた事件があったが、こうしたマスメディアのもち込む情報の内容の問題を中心に、われわれはこうした点について、もっと考えていかなければならないであろう。

すべての人間が自分の個性と要求を十分に生かした生き方ができるように——それを約束する社会に向けて、われわれは努力をつづける必要がある。とくに明日を担う、われわれの子どもたちのために。